

遠隔日本語交流会参加者の気づきと学び*

— 対面での交流会との比較結果から —

松浦恵子**

(e-mail : mamechan21@gmail.com)

<目次>

- | | |
|----------------------|--------------------------|
| 1. はじめに | |
| 2. 先行研究 | 6.2.分類・分析対象 |
| 3. 研究課題 | 7.振り返りシートの結果の分類 |
| 4. 遠隔交流会の内容 | 8. 考察 |
| 4.1.遠隔交流会の概要及び流れ | 8.1. ビジターセッションと共通する点 |
| 4.2.トピックについて | 8.2. ビジターセッションには見られなかった点 |
| 5. 遠隔交流会に参加した学習者数 | 9. 遠隔交流会における問題点 |
| 6. データの収集方法及び分類・分析対象 | 10. 今後の展望と課題 |
| 6.1..データの収集 | |

キーワード：日本語非母語話者(non-native speaker of Japanese), 文化の違い(difference of culture), ビジターセッション(visitor session), 遠隔交流会(remote meeting), オンライン交流会(online meeting), コミュニケーションの手段としての日本語(Japanese as the way of communication)

1. はじめに

日本語学習者は、通常日本語の学習を始めると日本に行くことや日本人と会話ができるようになることを目標に学習に励む。日本語が上手になるために日本語を頻繁に使いたいと思っても、韓国の大学の日本語学習者に限って言えば、たとえ日本語学部の学生でさえ日本語を使うのは授業中に日本語母語話者の教師とだけという学習者もいる。そのため、大学を卒業するまでに大学を休学して交換留学やワーキングホリデーで日本に半年から1

* 이 논문은 2017년도 부산외국어대학교 학술연구조성비에 의해 연구되었음.

**釜山外国語대학교 日本語創意融合学部 副教授

年ほど滞在することも珍しいことではない。日本のみではなく、カナダやオーストラリアに行く場合もある。松浦(2012)では、このような韓国語母語話者の日本語学習者が日本に行った時に直面する、日本語母語話者ではない人達との日本語によるコミュニケーションについて述べ、今後はそのような機会が増えるとした。そしてそれを疑似体験する機会を作るべく、釜山に滞在する韓国語母語話者ではない日本語学習者を筆者が担当する授業に招いた。そしてビジターセッションという形で、韓国語母語話者の学習者があらかじめ準備したトピックで話をした。その後の学習者の振り返りシートを、第三者言語接触場面(ファン2011)という立場から分類・分析した。その結果を4つに分類し、学習者が振り返りシートに実際に書いたコメントも参考に考察した。

しかしながら、学習のオンライン化が進んでいる近年では、すでに大学の教室内や日本へのワーキングホリデーだけが日本語に触れる機会ではない。また、勤務先大学のカリキュラム変更により授業でビジターセッションができなくなったため、スカイプなどを使ったオンラインによる遠隔交流会という方法で日本語非母語話者の日本語学習者同士が接する機会を授業外(学外)で作ってきた。そして参加した韓国の学習者を対象に、遠隔交流会を振り返る振り返りシートを出してもらい、セッションの内容やどのような学びや気づきがあったかを調査した。今後、非母語話者同士の日本語によるコミュニケーションの機会が増えるとしたら、それは対面のみではなくインターネットなどのオンライン上でも増えることが予測される。そして、対面でのコミュニケーションとオンラインでのコミュニケーションでは、おそらく共通するものと異なる点があると思われる。それらを明らかにすることは、オフラインで得られた成果を最大限に活用して授業やオンラインでの交流会に反映できるということではないだろうか。このような考えのもとに本研究では、授業に日本語非母語話者をビジターとして招いていた時の対面によるコミュニケーションとオンラインでの遠隔交流会の振り返りを比較し対面でもオンラインでも学習者が気づくことや学ぶことは同じなのか、何か違いがあるのかを分類・分析し明らかにする。

2. 先行研究

オンラインによる遠隔教育や遠隔交流会には、大塚他(2008)、森山(2010)、労他(2013)などがあり、韓国と日本、韓国、日本、ドイツ、アメリカ、ポーランド、タイ、チェ

コ、スウェーデンなどを結んだ遠隔授業や遠隔交流会を実施している。大塚他(2008)では、日本と韓国の高校を結びチームティーチングをしている。韓国の教授者はオフラインの教室に学習者と共におり、日本語母語話者の教師は日本にいて授業にオンラインで参加する。韓国の教授者はオンライン参加の日本人教授者をリードし、韓国語母語話者の学習者の仲介をしながら授業を進める。そしてそのような方法が効果的であり、学習者の興味を誘発や集中力の高まりも特徴として見られるとしている。また、森山(2010)では、世界7つの大学とのオンラインでの授業を実施した成果として「文化交流による他文化理解と自文化理解」「クルーフワークによる学び」「ふり返りによる新たな気づきと自己成長」「多言語使用環境と言語スキルの向上」を挙げている。そして芳他(2013)は韓国、スウェーデン、中国を繋ぐ遠隔交流会で教師が設定した交流会の目的と学習者が振り返りシートに記入した内容を照らし合わせ、合致するコメントと合致しないコメントをまとめている。そして、学習者のコメントの中から、「日本語の練習になった」「視野が広がった」が多いことを挙げ、さらに「話す相手によってスピードを変えるようになった」とし、「日本語母語話者と話す時と同じ調子で話すと、相手とのコミュニケーションが成り立たない。」ために、自分の日本語を調整することの重要性に学習者が気づいたことに触れさらに録音した会話の分析などの必要性について述べている。

また、松浦(2012)では、勤務先大学の授業に韓国語母語話者以外の日本語非母語話者をゲストとして招き、あらかじめ準備したトピックで話すビジターセッションを合計5学期間行なった。そして授業後に宿題として出した「振り返りシート」をKJ法により分類・分析した。その結果、①ステレオタイプの払拭②日本語学習へのさらなる動機付け③日本以外の国や文化への興味④日本語非母語話者の使用する日本語、という5つの分類を抽出した。そして「日本語母語話者を招いたビジターセッションとは違う意味で有効である。」と結論づけている。

しかしながら、このような先行研究は松浦(2012)はオフライン(対面)の研究であるが、その他は全てオンラインの研究であり、オフラインとオンラインを比較した研究は管見の限り見当たらない。しかし、オフラインで得られた成果とオンラインで得られた成果に共通点が見られるのであれば、その経験を活かして今後の授業やオンラインの交流会などにさらに活用できるのではないかと考えられる。本研究では、得られた結果を今後の授業やオンラインの交流会に活用すべくオフライン(対面)で行なった日本語非母語話者同士のコミュニケーション(ビジターセッション)と、オンラインの日本語非母語話者同士の遠隔交流会について学習者の気づきと学びに焦点を当てて比較する。

3. 研究課題

1章で述べたように筆者の勤務先大学の事情でビジターセッションを行なうことができなくなった後は、オンラインによる遠隔交流会という形で日本語非母語話者を繋ぐ試みをしている。本稿では、松浦(2012)をもとに以下のように研究課題を設定する。

「日本語非母語話者を繋ぐオフライン(対面)によるビジターセッションと、オンラインによる遠隔交流会には参加者の気づきや学びに共通するものがあるのではないか。」

4. 遠隔交流会の内容

本研究で述べる遠隔交流交流会は、スウェーデン、中国、韓国、日本の4つの大学に所属する教員により、以下のように行なわれている。

4.1. 遠隔交流会の概要及び流れ

参加国 :スウェーデン(ダーラナ大学)、中国(東華大学)、韓国(釜山外国語大学)、
日本(青森公立大学)

教員 :スウェーデン2人、中国1人、韓国1人、日本1人¹⁾

期間 :2012年2学期～2016年1学期(青森公立大学は2014年2学期から参加)

頻度 :1年に2回(1回のプロジェクトは、全部で8週間)

形式 :4～5人で1つのチームを7～8個作る。各チームメンバーはできるだけ所属大学や母語が同じにならないようにする。

日本語力 :中級～上級。チームを決める時にできるだけレベルが近い人を同じチームにする。

オンラインツール:Skype,Onedrive,Adobe Connect,Hangout等。

参加者の募集 :各教員の担当クラスやSNSで募集(募集対象は基本的に勤務先大学の学習者や学生²⁾のみ)

¹⁾教員5人のうち中国の教員のみが中国語母語話者で、残りはすべて日本語母語話者の教員である。

²⁾本稿では「学習者」とはスウェーデン、中国、韓国の大学からの日本語非母語話者の参加者を指し、「学生」

参加者の国は、スウェーデン、中国、韓国、日本だが、スウェーデンはオンラインで授業を行なう大学であるため、アメリカ在住のアメリカ人、スウェーデン在住のフランス人、ベトナム在住のハンガリー人、日本在住のスウェーデン人などもいて母語もスウェーデン語やフランス語、英語などさまざまであった。レベルは中級～上級で、チームを作る際には、教員が話し合っ1つのチーム内の日本語のレベルをできるだけ近くし母語が同じにならないよう配慮した。

1回のプロジェクトは4.1で述べた通り8週間で、その詳細は以下の通りである。

＜表1 プロジェクトの詳細＞

週	内容	参加
プロジェクト開始前	<ul style="list-style-type: none"> ・スカイプを使ったオンライン会議。内容はその学期のトピックやチーム分け（マッチング）、スケジュール確認など。 ・自分の大学の参加者に以下を知らせる。 <ul style="list-style-type: none"> ★所属することになったチームとメンバー ★Onedrive、スカイプの使い方。 ★自分の大学の参加者に「事前アンケート」を配布し学生のレディネスやこのような交流会の経験について質問。 	教員
1～2週目	<p>＜1週目＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Onedriveの指定されたフォルダに期日までに自己紹介のファイルをアップロード。 ・他のチームメンバーの自己紹介を第1回のセッションまでに読んでおく。 ・メールで第1回のセッションの日時を決め、スカイプのIDをお互い交換し登録。 <p>＜2週目＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1週目に決めた日時に、スカイプでオンラインになり第1回セッションをする。初回のみ教員がリード。万が一メンバーが約束の日時にオンラインにならなかった場合や、セッションの最後に決める事、セッションの報告の仕方、次回のトピックなどについて案内する。 ・セッションの報告担当になった参加者はOnenote³⁾にセッションに関する報告をする⁴⁾。 	参加者 教員 ⁵⁾

とは日本の大学から参加の日本語母語話者を指す。そして「学習者」と「学生」を合わせて「参加者」と呼ぶ。

3～4週目	<p><3週目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2週目の第1回セッションで、メンバーで決めたトピックについて作文を書きOnedriveの指定されたフォルダにアップロードする。 ・ 第2回のセッションまでに、チームメンバーの作文を読んでおく。 <p><4週目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回セッションで決めた日時にスカイプでオンラインになり遠隔交流会を実施する。第1回のセッションで決めた司会者が進行し、セッション報告担当者がセッション終了後Onenoteにセッションの報告をする。 	参加者
5～6週目	<p><5週目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 第2回セッションでメンバーで決めたトピックについて作文を書きOnedriveの指定されたフォルダにアップロードする。 ・ 第3回のセッションまでにメンバーの作文を読んでおく。 <p><6週目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 第2回セッションで決めた日時にスカイプでオンラインになり遠隔交流会を実施する。第2回のセッションで決めた司会者が進行し、セッション報告担当者がセッション終了後Onenoteにセッションの報告をする。 	参加者
7～8週目	<p><7週目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 第3回セッションでメンバーで決めたトピックについて作文を書きOnedriveの指定されたフォルダにアップロードする。 ・ 第3回のセッションまでにメンバーの作文を読んでおく。 <p><8週目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 第4回セッションで決めた日時にスカイプでオンラインになる。第3回のセッションで決めた司会者が進行しセッション報告担当者がセッション終了後Onenoteにセッションの報告をする。 	参加者
遠隔交流会終了後	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の大学の参加者の交流会終了後の「事後アンケート」⁶⁾を配布。 ・ 遠隔会議を開き、反省会と次回への改善点などについて話す。 	教員

3) Onenoteとは、マイクロソフトから公開されているデジタルノートアプリケーションのことである。

4) この報告は交流会のメンバー全員および教員が、オンラインで閲覧できるようになっている。内容はオンラインセッション

4.2. トピックについて

この交流会で扱ったトピックは以下の通りである。なお参加者に対する詳しい説明は所属大学の教員が交流会が始まる前に済ませることとし、読み物や動画などのリンクは学期ごとに作ったOnedriveのフォルダに入れフォルダのリンクを参加者に共有することで交流会の期間中に参加者が自由にアクセスできるようにした。

①第1回トピック

- ・自己紹介

②第2回トピック

・「日本と日本文化」というテーマで教員があらかじめ準備した複数の読み物や動画の中からチームのメンバーで1つ選ぶ。

③第3回トピック

・「社会と文化」というテーマで教員があらかじめ準備した複数の読み物や動画の中からチームのメンバーで1つ選ぶ。

④第4回トピック

- ・最後はチームメンバーで自由に話したい内容でトピックを選ぶ。

5. 遠隔交流会に参加した学習者数

遠隔交流会に現在まで参加した各国の学習者は<表2>の通り合計278人である。スウェーデンと中国、日本はこの遠隔交流会を授業の一環として取り入れている。そのため、担当教員の授業を受講している学生の数がこの交流会に参加する数となる。

ンの所要時間、トピック、簡単な感想、次回のセッションの日時、トピック、司会者、セッションの報告者など。
5)教員は2週目のセッションのみ参加。必要な説明をしてから雰囲気を見て先にセッションを抜けて後は参加者に任せることもある。

6)アンケートは「事前アンケート」「事後アンケート」ともにOnedriveのアンケートフォームを使用。

＜表2 遠隔交流会参加者数＞

	スウェーデン	中国	韓国	日本	学期ごとの合計
2012年春	4	3	9(内3人は他大学)	0	16
2012年秋	5	8	8(内5人は他大学)	0	18
2013年春	16	17	8(内2人は他大学)	0	41
2013年秋	16	17	8(内2人は他大学)	7	48
2014年春	16	9	2	4	31
2014年秋	10	9	9(1人は他大学)	9	37
2015年春	8	9	4	0	21
2015年秋	22	9	4	7	43
2016年春	9	8	4	2	23
合計	106	89	43(釜山外大の学生のみ)	29	278

単位(人)

(※2013年秋及び2014年春に参加した日本からの参加者は青森公立大の学生ではなくスウェーデンの教員の知り合いである。)

6. データの収集方法及び分類・分析対象

6.1. データの収集

釜山外大の学習者には各セッション終了ごとに振り返りシートを、そしてプロジェクトの最後に最終アンケートという形でプロジェクト全体を振り返る質問に答えてもらった。これらの振り返りには、Onedriveのフォームを使用し必要に応じてフォローアップインタビューを行なった。この振り返りシートはOnenoteを使い、チームごとにセッションの報告をする時とは異なり、教員(筆者)以外は見ないことを伝えた。振り返りシートは、毎回のセッション後のものは質問項目も少なめでプロジェクトの最後の最終アンケートは主にセッションの感想、セッションから学んだ言葉、セッション中に困った事、セッションでうまくいったと思う事などで構成されていて、松浦(2012)と類似している。そのため、松浦(2012)と比較するのは、毎回のセッションの振り返りではなくプロジェクトの最後の最終アンケートの回答とする。なお、最終アンケートについては付録を参照されたい。

6.2. 分類・分析対象

この遠隔交流会には、2014年から日本語母語話者が参加することになった。そのた

め、釜山外大の学習者が参加したチームの中には日本語母語話者がいるチームに入った者もいる。本研究は日本語非母語話者同士のコミュニケーションに焦点を当てるため、日本語母語話者がいるチームに入った場合は分析の対象外とする。日本語非母語話者だけのチームに入った学習者は以下の〈表3〉の通りである。

〈表3 韓国の学習者（釜山外大の学習者）のデータ〉

	参加者数	日本語母語話者がいないチームにいた学習者数(A)	(A)の振り返りシート(最終アンケート)回収数
2012年春	6	6	6
2012年秋	3	3	2
2013年春	6	6	6
2013年秋	6	0	0
2014年春	2	2	1
2014年秋	8	0	0
2015年春	4	4	4
2015年秋	4	3	3
2016年春	4	3	3
合計	43	27	25

単位(人)

本遠隔交流会の韓国の学習者の中には、釜山外国語大学の学習者ではない場合もあった。本研究では、松浦(2012)と比較するため、釜山外国語大学の学習者の振り返りシート(最終アンケート)のコメントのみを分類・分析の対象とする。そして、その中でも日本語母語話者が入っていない日本語非母語話者同士の交流の振り返りシート25枚を分類・分析の対象とする。

7. 振り返りシートの結果の分類

釜山外国語大学の学習者の振り返りシート(最終アンケート)、25枚に記入されていたコメントをKJ法により分類すると以下ようになる。なお、括弧の数字はコメントの数を表す。

- < 1 > 日本語学習へのさらなる動機付け (1 1)
- < 2 > 日本語非母語話者の使用する日本語 (1 0)
- < 3 > ステレオタイプの払拭 (8)
- < 4 > コミュニケーションの手段としての日本語 (5)
- < 5 > 日本以外の国や文化への興味の広がり (3)
- < 6 > 通信関連 (ネットやカメラ、マイクの状態) (1 1)

この分類の具体例の原文を抜粋して挙げると以下ようになる。

< 1 > 日本語学習へのさらなる動機付け

- ・ 「日本の日本語もまだまだみがき直す必要がある」(2012年秋)
- ・ 「日本に1年も住んできたのにまだまだだと思いました。もっと頑張りたいと思いました。」(2013年春)
- ・ 「メンバーの中で特にスウェーデンの人が日本語が本当にネイティブだったので、私に刺激になりました。」(2015年春)

< 2 > 日本語非母語話者の使用する日本語

- ・ 「国々によってよく使う言葉の違いが「あ、こんな単語とか文法もあるんだな」と考えられる機会になりました。そして相手の国の文化とかもすこし分かったのでとてもたのしかったです。」(2012年春)
- ・ 「国によって使う単語が少し違うこと」(2013年春)

< 3 > ステレオタイプの払拭

- ・ 「〇〇人だからこうかも知れないという先入観がなくなりました。」(2013年春)
- ・ 「中国はあまりいいイメージではなかったですが、中国には男より女ということもあるしただ地域感情で嫌うことは悪いとまた考えました。」(2015年春)

< 4 > コミュニケーションの手段としての日本語

- ・ 「日本語を知らなかったらちゃんと話すことも出来なかったはずの外国の人と色々な事を話すことが出来たのがとっても良かったです。」(2012年春)
- ・ 「少し不思議な感じがしました。日本語を使って他国の文化などを教えてもらったり、

交流したりしながら色々勉強になりました。」(2012年春)

- ・ 「どうすれば分かりやすい日本語が話せるのかを考える機会になった。」(2013年春)

< 5 > 日本以外の国や文化への興味の広がり⁷⁾

- ・ 「いつかスウェーデンに行きたくなりました。」(2013年春)
- ・ 「もっと世界を見る目が広がることになりました。」(2014年春)

< 6 > 通信関連(ネットやカメラ、マイクの状態)

- ・ 「インターネットの問題だと思う。画像通話だと、中国の場合は接続に色々障害が発生するので、いっそのこと音声だけで話をするのがいいと思う。」(2012年春)
- ・ 「カメラの調子が悪くて全然見えなかった。」(2015年春)

8. 考察

2章で述べたように、松浦(2012)では対面による日本語非母語話者を招いたビジターセッションの振り返りから、次のような項目が抽出されている。

- ①ステレオタイプの払拭
- ②日本語学習へのさらなる動機付け
- ③日本以外の国や文化への興味の広がり
- ④日本語非母語話者の使用する日本語

これらとオンラインの遠隔交流会からの振り返りシートの結果と比較してみる。

8.1. ビジターセッションと共通する点

6章の< 1 > ~ < 3 >そして< 5 >は松浦(2012)と同じである。対面のビジターセッションであってもオンラインであっても違う国で同じように日本語を勉強している学習者同士が

7) 「日本以外の国や文化」とは、具体的には同じチームメンバーの出身国や滞在国を指す。つまり、4.1.で述べたようにスウェーデンの大学の学生はスウェーデン在住のスウェーデン人とは限らない。

話すことで、「自分も、もっと頑張ろう」や「国や母語が変われば使う言葉が変わること」を実感している。特に< 2 >の「日本語非母語話者の使用する日本語」は、韓国語母語話者しかいない教室で日本語母語話者の授業を聞いていても、学習者には知る術がないのではないだろうか。また、逆に自分自身の日本語は相手にはどのように聞こえるのかを考える良いきっかけであるとも考えられる。

また、セッション前と後では持っていたイメージがよい意味で変わり、ステレオタイプがなくなり同じチームのメンバーの出身国や滞在国に興味を持っている。1つの国への先入観やよくないイメージが交流会によって良くなることは、交流を深める上での第一歩であり歓迎すべき点であると思われる。そして、このような結果が対面でもオンラインでも見られるということは、対面かオンラインかは関係なくこのような交流会を通して学習者には同じような気づきが起こることを示唆しているのではないだろうか。

8.2. ビジターセッションには見られなかった点

松浦(2012)では見られなかったものに< 4 >「コミュニケーションの手段としての日本語」と< 6 >「通信関連(ネットやカメラ、マイクの状態)」がある。対面で行なっていたビジターセッションは1学期間に1度だけであったのに対して、オンラインのセッションは1学期間に4回のセッションがある。そのため4回も違うトピックで日本語非母語話者同士で話そうとすると、どうしてもコミュニケーションの手段としての日本語を実感せざるを得ない状況になると思われる。それは、「どうすればわかりやすい日本語が話せるかを考える機会になった。」という学習者のコメントからもわかる。これは、話す相手によって単語を易しくすることやスピードを調節することにより、コミュニケーションが円滑になることを体験したからこそのコメントだと思われる。このように学習者は、日本語母語話者と話す時には経験できないことを体験し、自ら学んでいることが垣間見られた。また、このように教師に教えられるのではなく自らの体験による気づきは、おそらく簡単に忘れることなく学習者の記憶に残りやすいのではないかと思われる。

次に< 6 >は、通信に関するものである。予算などの関係で無料で利用できるツールに頼ることになるが、中国国内で使えるものとそうでないものがあり学生が接続してくる場所(自宅、大学の寮、独り暮らしのアパートなど)によっては声がかうまく聞こえないことや画像がちんと映らないこともあった。これは対面でのビジターセッションには起こり得ないことである。

9. 遠隔交流会における問題点

オンラインでの遠隔交流会は場所を選ばず、世界中の日本語学習者を繋ぐことが可能だ。また、8章の結果からオフライン(対面)での結果と共通する点も確認できた。しかしながら、今度はオンラインならではの、そして共同研究ならではの問題が浮上してきた。

- A.各大学のスケジュールを合わせること
- B.通信状態を常に安定させること
- C.時差の問題
- D.参加大学ごとに学生の数を揃えること

現在までのところ、春学期は3月から、そして秋学期は10月ごろからこの遠隔交流会をスタートさせている。釜山外大は1学期は3月に始まり2学期は9月に始まる。そのため、学期の途中から交流会が始まる2学期に比べ1学期は開講後すぐ交流会が始まるので、学習者の募集がうまく進まないこともある。そのため大学のスケジュールや参加者の募集はA.やD.といった問題に繋がった。B.は本研究のみではなく大塚他(2008)でも森山(2010)でも指摘がされているオンラインならではの問題ではないかと思われる。通信状態の問題がなければセッションがスムーズに進み学習者が気づくことにも影響があるかもしれないと考えると非常に残念である。C.の時差の問題は国が遠ければ遠いほど起こる問題だ。スウェーデンとの時差が7～8時間、中国との時差が1時間、日本との時差は無しである。スウェーデンに合わせると韓国時間の夜10時や11時にセッションを行うことになる場合が多く、アルバイトやサークル活動をしている学生には時間の調整が難しいこともあった。

これらの新たな問題に対し、A.については本来全部で8週間の交流会だが大学の定期試験期間などがある場合は2週間で1週間と数えるなどして学生の負担を減らすよう工夫している。また、B.は常に安定させるのはなかなか難しいため、スカイプ以外のツールも試している途中である。C.は、スウェーデンや中国の学生でも日本に留学中の学生は日本や韓国との時差がない。アルバイトやサークル活動で遠隔交流会に参加できる時間が限られている場合には、時差が少ない(または時差がない)国にいる学生をメンバーとするなどした。D.は参加希望者が多い場合は先着順にすればいいのだが、希望者が少ない場合は学生の数が揃わないため、1つのチームに同じ言語が母語である学生が2人入る事態とな

る。それを避けるためにスウェーデンの学生で母語が違う学生を1つのチームに2人入れるなどの工夫をした。

10. 今後の展望と課題

以上から、オフライン(対面)で実施してきたビジターセッションでの学習者の気づきや学びは、オンラインになっても共通点が見られることがわかった。現在、筆者が勤務先大学で担当している授業では、ビジターセッションを中心とした授業は行なえないが、オンラインの交流会という形で授業の一部として取り入れることや、オンラインの遠隔交流会のトピックを多様化し日本や日本語のみに絞らずトピックの幅を広げて行くべきであると思われる。それは、日本語非母語話者同士の交流から学習者が自ら気づき、学ぶことで学習者が日本語を駆使することのみならず、知識が増えると同時に視野も広がることが予想されるからだ。

また、通信手段の安定もさることながら同じ遠隔交流会に参加しているスウェーデンや中国、日本の学生たちが遠隔交流会への参加により学んだことや気づいたことについても焦点を当て、同じ遠隔交流会に参加しても気づきや学びにはどのような共通点や相違点が見られるのかを調査し、その傾向や課題を明らかにすることを今後の課題とする。

【参考文献】

- 大塚薫、金才鉉(2008)「日本語母語話者教授者参加型遠隔チーム・ティーチング授業の試み」『メディア教育研究』第5巻 第1号 pp.115-121.
- サウクエン・ファン(2011)「第三者言語接触場面と日本語教育の可能性」『日本語教育』150号 pp.42-53.
- 松浦恵子(2012)「韓国の大学における日本語非母語話者を招いたビジターセッションの意義—第三者言語接触場面の観点から—」『日本文化学報』54集 pp.35-50.
- 森山新(2010)「グローバル時代に求められる総合的日本語教育—多文化・多言語サイバーコンソーシアムの成果と可能性—」『比較日本学教育研究センター研究年報』Vol.6pp.163-169.
- 労軼琛、岩崎浩与司、斎藤里衣子、松浦恵子(2013)「非母語話者同士の学びを支える実践—韓国・中国・スウェーデンをつなぐ遠隔交流の試み—」『2013年WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』pp.1-10.

【付録】

セッションの最終アンケート (2016年春用)

最終アンケート (日本語学習者用)
2016年春 遠隔日本語交流会

アンケートにご協力お願します！
アンケートは一時保存できないので、OneDriveにあるワードに下書きをしてからコピーするといいです。

1. 名前

2. 所属

3. チーム

4. この交流会が、異文化理解に役立ったと思いますか。交流会を通して、どんなスキルが身についたと思いますか。どんなことができるようになりましたか (例: 一人設備しながら、ネットするようになった)。また、異文化を理解できる力は、今後どんな場面で大かせると思いますか。

5. 異なる母語や文化を持つ人々と「対話」するとき、何からがけなければいけないことがありましたか。同じ母語や文化を持つ人と「対話」する時と、何が違いがありましたか。それは、どんなことでしたか。

6. この交流会を通して、一番学んだことは何ですか。

7. 日本語学習に関して、何か学んだことはありましたか。

8. この交流会について、改善してほしいことや、希望することは何ですか? 何でも自由に記入してください。

以下は、釜山外大の学生だけ答えてください。
9. このプロジェクトに参加する前と後で、セッションのメンバーの国に対するイメージが変わりましたか。

10. Q9で「はい」と答えた人は、どこの国のイメージがどう変わりましたか。「いいえ」と答えた人は、なぜ変わらなかったと思いますか。

11. 今回のような「日本人でも韓国人でもない人」と日本語を使ってコミュニケーションすることは、今後のあなたの日本語学習や異文化交流にどんな影響をあたえそうですか。

送信 パスワードは絶対に他の人には教えないでください。情報できないユーザーには個人情報を提供しないでください。不正使用を報告

Powered by Microsoft Excel

논문 투고 일자 : 2017. 11. 30.
논문 심사 일자 : 2018. 01. 31.
계재 확정 일자 : 2018. 02. 05.

＜要旨＞

遠隔日本語交流会参加者の気づきと学び
—対面での交流会との比較結果から—

松浦恵子

筆者は、勤務先大学で釜山に在住する韓国語母語話者以外の日本語学習者を授業に招き韓国語母語話者と日本語で会話をするというビジターセッションを行なってきたが、勤務先大学のカリキュラムの変更などによりビジターセッションを行なうことができなくなった。そのためオンラインで同様の交流ができないかと考え2012年よりスウェーデン、中国、韓国、日本（日本は2014年から）をオンラインでつなぐ遠隔交流会を実施してきた。そして、実際に教室に招いてする交流とオンラインでの交流には共通するものがあるのか、異なる点があるのかを明らかにすべく、松浦(2012)でビジターセッションで得られた振り返りシートの結果とオンラインセッションで得られた振り返りシートの結果とを比較した。その結果、対面であってもオンラインであっても学習者が気づき学ぶことには「ステレオタイプの払拭」や「日本語学習へのさらなる意欲」などの共通点が見られた。一方でオンラインならではの通信状態に関する問題点やスウェーデン、中国、日本の大学との共同研究としたため各大学とのスケジュール調整や各国からの参加人数を合わせる難しさなど新たな課題も浮彫りとなった。

The awareness and learning of remote-meeting participants
- Results of comparison with face-to-face meetings-

Matsuura, Keiko

The author has been invited Japanese language learners other than Korean native speakers living in Busan at her university to attend her classes, and held visitor sessions to talk with Korean native speakers in Japanese. However, it has become impossible to conduct visitor sessions because the university curriculums were changed. Therefore, the author has been conducting the online meetings instead that connect Sweden, China, Korea, and Japan (Japan joined in 2014) since 2012. Matsuura(2012) shows the results of the reflection sheets of visitor sessions which states the students' comment in the reflection sheets can be classified such as "eliminating stereotypes", "motivation for learning Japanese" and "interests to new cultures". In this thesis, the students' comments on reflection sheets after online meetings and comments from Matsuura(2012) were compared. As a result, similarities such as "eliminating stereotypes" and "motivation for learning Japanese" were observed, regardless of whether the sessions were face to face or online. However, as the collaborative research was being conducted with universities in Sweden, China, and Japan, problems such as adjusting schedule and matching the number of participants from each country were occurred.